

第3 南樺太（サハリン南部）における戦闘等の概要

1 日ソ開戦前の部隊の状況

開戦前南樺太には、陸軍の第5方面軍（司令部は札幌）に属する第88師団と、方面軍直轄部隊及びわずかの海軍部隊が配置されていました。また、南樺太・千島に居住していた邦人の数は約28万人と推定されます。

2 各地の戦闘

(1) 国境正面の戦闘

8月9日旧ソ連邦参戦の報により師団長命令を受けて、気屯にあった歩兵第125連隊長は、古屯の一個大隊を直ちに八方山の既設陣地（国境南方10km）に入らせ、さらに上敷香及び内路の同連隊主力を急遽北上させ10日朝までに八方山の配備を終えました。ソ連軍は10日以来、国境の日本軍監視部隊を攻撃していましたが、1個から2個師団をもって11日朝南下を開始し、13日八方山東北側の前進陣地を攻略し、14日より17日に至る間、八方山の主陣地を中心として激しい攻防が反復されましたが、連隊はよく主陣地を確保し、この間幌内川右岸を古屯付近に進出したソ連軍主力との間にも激戦が展開されました。

こうした状況の中で18日朝、戦闘行動停止の師団命令に接した連隊は、当面のソ連軍師団長との間に局地停戦の交渉にあたり、19日武装解除し、国境陣地の戦闘は終息しました。

(2) 真岡正面の戦闘

真岡付近には歩兵第25連隊の第1大隊が守備についていましたが、既に停戦の命令を受けた後の8月20日朝にいたり、ソ連軍は艦砲射撃の後上陸を開始しました。大隊長は連隊長の命により軍使を派遣しましたが、ソ連軍は軍使を射殺し、更に避難する住民に対しても攻撃を加えたので、遂に日ソ両軍の間に戦闘が開始されました。この状況から、同連隊の第3大隊は留多加から救援に向かいましたが、真岡付近を突破した約1個旅団のソ連軍と、22日真岡付近の熊笹峠付近で遭遇し、激戦の後翌23日に至って連隊長自ら停戦交渉にあたり、ようやく現地において武装を解除しました。

(3) 恵須取正面の戦闘

歩兵第25連隊の一部は、西海岸の恵須取付近を警備していましたが、13日ソ連軍の上陸部隊を迎えてこれを撃退し、その後ソ連軍艦砲射撃及び爆撃をしのぎ、同地を確保しつづけました。

しかし、16日恵須取北方海岸に約1個師団のソ連軍が上陸し、かつこのソ連軍との現地停戦の交渉が決裂したので、18日夜部隊をまとめて内路に転進し24日同地において武装解除の師団命令を受領しました。

(4) 特設警備隊

日ソ開戦とともに各部隊はかねて準備したところにより、在郷軍人、中等学校及び青年学校生徒の防衛召集を行って特設警備隊を編成しました。これらの部隊は、沿岸警備、対空監視、陣地構築及び軍需品の輸送作業等に従事しましたが、上敷香、恵須取、真岡付近の部隊は軍の戦闘に参加し、一部の戦死者をも出すに至りました。

(5) 停戦、武装解除の完了

停戦命令を受けた第88師団長は、直ちに現地における停戦交渉に努力しましたが、前述のごとく幾多の曲折を経て停戦が実行され、南樺太全体の武装解除が終わったのは8月28日でした。

日ソ戦闘開始から武装解除までの日本軍の死亡者は、千島を含み2,500名と推定されます。

(6) 在留邦人の行動

日ソ開戦とともに、敷香、内路、落合、豊原、塔路、恵須取等の各地はソ連軍の爆撃を受け、また、名好、恵須取、真岡においては上陸攻撃を受けたため、在留邦人にも多くの犠牲者を出しました。

その数はおおよそ真岡1,000名、恵須取190名、塔路180名、豊原100名、敷香70名、落合60名といわれ、南樺太における邦人犠牲者総数は約2,000名と推定されます。

一方、樺太庁長官は軍の要請と樺太の事態に鑑み、婦女子、老幼者等を北海道に疎開させることとし、連絡船はもとより機帆船、海軍の挺船をも利用して、大泊、本斗から北海道の稚内・小樽に向け緊急疎開を開始しましたが、8月23日ソ連軍の禁止するところとなり、やむを得ずこれを停止しました。

この緊急疎開により離島できたものは約76,000名でしたが、この間小笠原丸、第二新興丸及び泰東丸は、22日北海道増毛町沖及び苫前沖において潜水艦の攻撃を受け海没し、犠牲者約1,700名を生ずるに至りました。

第4 樺太方面遺骨収集の経過と送還状況

1 樺太及び千島地域における戦没者の遺骨収集については、平成2年5月になって初めて旧ソ連邦政府の原則的同意が得られたことを受け、同年9月、旧ソ連邦側が収集した樺太の旧国境付近の遺骨16柱と北千島の占守島の遺骨7柱の計23柱を受け取りました。

その後、樺太地域においては、平成27年度までの間、遺骨収集あるいは調査を実施し、これまでに251柱（他に占守島43柱）の遺骨を収集しています。

2 樺太地域における遺骨収集は、当時を知る住民がほとんどいないために確たる遺骨情報が得られないことや、戦闘地域がツンドラ地帯であり遺骨が奥深い山野に散在している等の事情から、作業の進展には困難な面があります。